

LATVIA

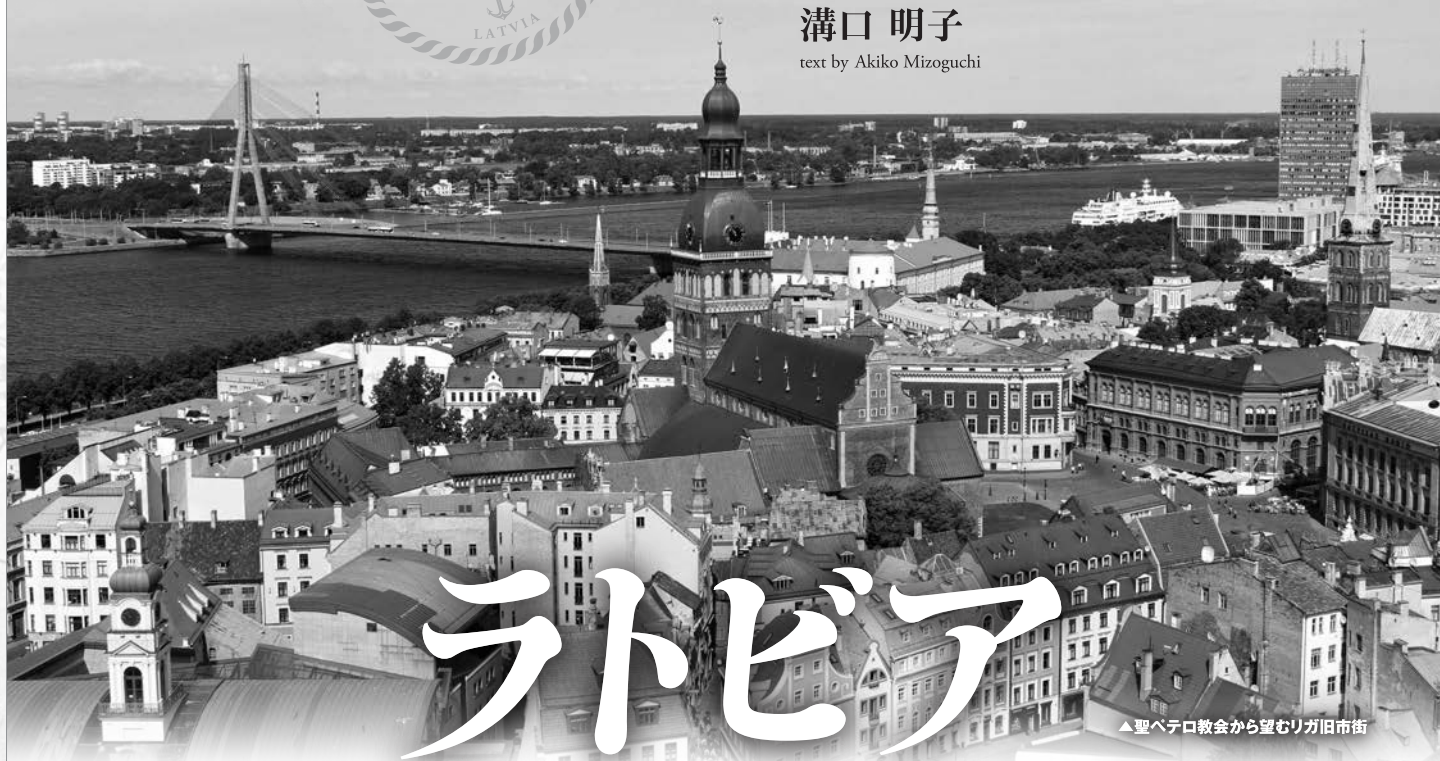


ワールドウォッチ

関西日本ラトビア協会 常務理事

溝口 明子

text by Akiko Mizoguchi



▲聖ペテロ教会から望むリガ旧市街

ラトビア 歌う民が住まう国

バルト海に面する北欧の小国、ラトビア共和国。自然があふれる美しい大地には歌と踊り、伝統文化を大切に継承する人々が暮らしています。一方、近年ではIT先進国として世界をリードしています。「バルト海の真珠」と評される首都リガ市はロシア、ベラルーシ、そしてラトビアを貫く大河ダウガワ川がリガ湾に流れ込む河口に位置し、古くから交易都市として栄えました。現在でもリガ港はヨーロッパと独立国家共同体(CIS)※1を結ぶ重要な物流の拠点として、また大型外航クルーズ船の寄港地としてますます存在感を発揮しています。

※1 加盟国: アゼルバイジャン, アルメニア, ウズベキスタン, カザフスタン, キルギス, タジキスタン, ベラルーシ, モルドバ, ロシア 準加盟国: トルクメニスタン(外務省の定義による)



Latvia



ラトビアの概要

ラトビア共和国はフィンランドの南方にあるバルト三国(エストニア、ラトビア、リトアニア)の中央に位置し、面積は約6.5万km²(北海道の約77%)、人口は約192万人(2019年1月現在)の小さな国で、北部のヴァイゼメ地方、東部のラトガレ地方、南部のゼムガレ地方、西部のクルゼメ地方から成り、9の特別市と110の地方自治体で構成されています(2021年に再編予定)。自然が豊かな国で北海道を彷彿とさせる四季があります。EU加盟国で公用語はラトビア語、通貨はユーロが採用されています。民族構成はラトビア人が62.2%、ロシア人が25.2%など。政体は共和制、元首は大統領(任期4年)、議会は一院制(100議席、任期4年)です。主要産業は木材加工業、食品加工業、化学・薬品、機械・金属産業などで、2018年のGDP実質成長率は4.8%でした。



近代以前の歴史

ラトビア人の起源であるバルト族がインド北西部を源流に黒海北岸、現モスクワを経てこの地に移り住んできたのは紀元前2000年頃であるといわれています。バルト族はインド・ヨーロッパ語族バルト語派に属し、現在のラトビア人、リトアニア人に当たります。同じバルト三国でもエストニア人はウラル語族フィン・ウゴル語派に属し、民族の成り立ちが全く異なります。

耕作や牧畜を開始して定住し、地勢の良さから交易も盛んになったこの地に転機が訪れたのは1201年。ドイツ人司教が北方十字軍と共に到来しリガの建都を開始、同時にキリスト教化を推し進めていきます。1282年にリガ市はハンザ同盟に加盟し、1290年にはラトビア全土がドイツの騎士団の支配下に置かれました。後述するようにラトビア人が土着の自然崇拜を重んじていたことから、ドイツ人は“ラトビアは未開の地である”と主張。従属を正当化して、ドイツ人領主とラトビア人小作農という関係を構築しました。

その後も周辺国による覇権争いによりラト



▲「森と湖の国」ラトビア

ビアの一部もしくは全土が、リトアニア・ポーランド領、スウェーデン領、帝政ロシアとポーランド領に、といった変遷をたどり、ついに1795年全土がロシア帝国に編入されることになりました。

19世紀後半になるとドイツ人が築いた封建制度が終焉を迎え、資本主義経済と都市化が加速していきます。その結果、ラトビア人の中産階級が生まれ、知識階級によるラトビア民族啓蒙運動が盛んになり、この状況を危惧したロシア帝国当局によりロシア化政策が図られる事態になりました。日露戦争の際、バルチック艦隊が出航したのはロシア帝国下にあったラトビア西部の港町リエパーヤでした。



近現代の歴史

第1次世界大戦の影響を受けながらもラトビアは1918年11月18日に独立を宣言、荒廃した国土で産業の立て直しを開始しました。しかし、1939年に締結された独ソ不可侵条約に附属していた「ソ連はラトビアを支配下に置く」という秘密議定書の取り決めのもと、ラトビアは1940年にソ連の侵攻を受けて併合され、翌年には15,000人以上の罪無き人々がシベリアへ流刑となりました。その後、ドイツ帝国へのラトビア併合をめぐりナチスドイツ軍が条約を破って奇襲攻撃を行いソ連下のラトビアを奪取。独ソ戦は以後も続き、それぞれの軍へ編入させられたラトビア人同士が対峙することもありました。1944年にソ連がナチスドイツを撃退すると、ラトビアはまたもやソ連の支配下へ。再び

数万人単位での流刑や処刑、亡命が続き、またソ連の政策である集団農場化と計画経済が進められた結果、ロシア系住民がラトビアに大量に入植し民族構成が激変、現代に至る民族問題となっています。

その後ソ連の国家体制の綻びと共にくすぶっていた再独立への動きが加速し、1939年の独ソ不可侵条約締結から50年の節目の日となる1989年8月23日、占領への抗議を込めた独立運動「バルトの道」によってバルト三国の首都が人間の鎖でつながりました。全長600kmの距離を200万人が歌いながら手をつなぎ結んだのです。そしてついに1990年5月4日、ラトビアは独立回復を宣言、翌年に事実上の独立を回復しました。主権を取り戻したラトビアは国家としての輝きも取り戻し、EUやNATO、OECD、WTOに加盟。2014年には独自通貨からユーロへと移行、2015年上半年期にはEUの議長国も務めました。

最初の独立から100年以上に及ぶ期間のうち、その大半を占領の憂き目に遭ったラトビアですが、一人ひとりが誇り高く持つラトビア人としてのアイデンティティーが砦となり、苦しい時代を乗り越えてきたのです。



首都リガ市

1201年にドイツ人司教によって作られたリガは人口約63万人(2019年1月現在)、面積約304km²でバルト三国最大の都市。中心にある旧市街は全体が世界遺産で、ハンザ同盟時代から残る建築群や細い路地、通りに敷き詰められた石畳が中



▲ダウガワ川遊覧船から眺めるリガ旧市街

背景を持つ個性豊かで穏やかな雰囲気を
持つ町や村が点在しています。リガ近郊に
あるユールマラは海岸沿いの保養地として
人気の場所、ケメリには大湿原が広がる国
立公園があり遊歩道を散策できます。ヴィ
ゼメ地方の中央にあるツェーシスはリガに
次ぐ古都で中世の古い街並みや古城を楽
しめ、スィグルダは国立公園でもあるガウヤ
川渓谷沿いに立つトライダ城を擁していま
す。ゼムガレ地方にはバルトのベルサイユ
宮殿と呼ばれる絢爛豪華なルンダーレ宮殿
なども。また最近では田園ツーリズムも旅行
者の人気を集めています。



四季と共に暮らす ライフスタイル

ラトビアの地に立つと印象的なのが緑の
多さです。国土の約半数を森が占め、
1,000を超える河川と湖沼が点在する自然
豊かな土地で、稀少な動植物も生息してい
ます。最高峰でも標高312mしかなく、平坦
な大地がどこまでも広がっています。日本

と同様に四季があり、新芽が芽吹く
緑まぶしい春、花が咲き誇る色鮮や
かな夏、黄金色に輝く紅葉の秋、モ
ノクロームの世界が広がる白銀の冬
と季節は移ろいます。ラトビア人は自
然の中で過ごすのが大好きで、都
会で暮らす人々も時間があれば森
や川、湖、海へ出かけます。特に森
でのアクティビティーは食生活の面
でも重要であるといえます。

冬が長いラトビアで待ち遠しいの
が春。春の訪れは「白樺の樹
液のジュース」と共にやってきま
す。春が始まる直前のわずかな
期間に採取できるこの飲み物
を、味はもちろんのこと春の使
者としても心待ちにしています。
夏はベリー摘み。ブルーベリー
やこけもなどをつまみ食いしな
がら集めます。ラトビアではハー
ブティーを常飲するので、森や
野原ではハーブも摘みます。秋
にかけて始まるのがキノコ狩り。
ラトビア人はそれぞれ秘密のス
ポットを知っていて、毎週のように

世の雰囲気を今に伝えています。「城通り」
「職人通り」といった名前からは当時の様
子に思いを馳せることができ、街を縦断する
ダウガワ川の旧市街対岸からは教会の尖
塔が立ち並ぶ旧市街の美しいパノラマ風
景を楽しめます。

また、頻繁に花束を贈る習慣があるラトビ
ア人にとって花は生活の一部であり、世界
トップレベルのオペラやオーケストラなどの
芸術も身近に楽しめる環境にあるの
で、旧市街はただ中世の面影を残
すのみならず、花や音楽、滲み出す
ラトビアの奥深い伝統文化が重なっ
て独特の情緒を醸し出しています。
さらには世界一の棟数を誇るアール
ヌーボー建築群とラトビア独特の木
造建築群もリガの街に色を添えて
おり、いずれも世界遺産の一角を成
しています。港湾都市であるリガは
同じく港町である兵庫県神戸市と
1974年に姉妹都市提携を締結し
ています。



魅力ある観光地

リガの旧市街は徒歩で観光
を楽しめます。貿易商の社交場
だったブラックヘッド会館をはじ
め、15～17世紀建造の住宅が
並ぶ「三人兄弟」、現存する唯
一の城門であるスウェーデン門
などを巡った後は、13世紀初
頭建造のリガ大聖堂で世界最
大規模のパイプオルガンの音

色を楽しみ、17世紀建造の聖ペテロ教
会尖塔の展望台からリガの景色を見渡し
てください。ソ連占領時代でも破壊されな
かった自由記念碑はラトビア人にとって今
も大切な場所で、献花が絶えず重要なセ
レモニーなどが開催されます。

地方を旅するとより一層感じるのがラトビ
アの風土の魅力で、異なる地形や歴史的

▼リガ市街地はアールヌーボー建築の宝庫



▲ツェーシス城と背後に広がる大平野



▲キノコ狩りにて

に籠いっぱいキノコを採りに森に向かいます。冬になればクリスマスツリー用のモミの木を伐りに森へ。また、蜂を飼って自家製蜂蜜を作るのも珍しいことではありません。

こうして集めたたくさんの食材は即調理されることもあれば、ジャムやピクルスなどの保存食にもなります。植物や食材の選別眼や利用法は、親が子を森に連れていくことにより代々受け継がれています。



田舎暮らし

多くのラトビア人は自宅から離れた森の中にサマーハウスと呼ばれる別宅を持っています。余暇は家族や親しい友人とサマーハウスでのんびりするのが一般的。畑や庭仕事をしたり、森の中を散歩したり、ベリーやキノコ、野草を摘んだり、釣りに出かけたり、水遊びを楽しんだり。時間を気にすることなく、ただただ自然の中で過ごす心豊かな暮らしです。

サマーハウスにしばしば併設されているのが、伝統的な蒸し風呂式のサウナである「ピルツ」。薪を燃やして温められた室内には熱くなった石が置かれ、これに水をかけて蒸気を発生させます。ピルツでは樅や白樺の枝で身体を叩くのですが、身体にはマッサージ効果があり、室内にはアロマのように木の香りが広がり、さらに不均等な蒸気と



▼ラトガレ地方のとあるサマーハウス

Latvia



かき回す効果があります。身体が熱くなったら外へ出て池へジャンプ。ピルツと池を往復し寒暖を感じるにより血行の流れが良くなります。ピルツ

の歴史は数百年といわれ、古くはスモーク小屋や出産の場としても使われていました。

するラトビア料理。定義付けは難しいのですが、断言できるのは「おいしい」ということ。豊かな土壌で育った野菜と果物が旬の時期に用いられ、地勢的、歴史的要因からさまざまな民族の料理が取り込まれ、その長所が混ざり合ってきたのがラトビア料理です。家庭に伝わる素朴な郷土料理はもちろん、多様な調理法で提供される見目麗しい



▲飛行船の格納庫を利用した中央市場



食生活

ライ麦を原料とする黒パンやジャガイモを主食とし、乳製品が豊富で肉も魚も食材と

創作ラトビア料理も定着しています。

巨大なドームが並ぶ中央市場。1930年の開業時にはヨーロッパ最大規模を誇ったこの市場は、現在も毎日10万人近くが訪れるラトビア人の台所です。第1次世界大戦中にドイツの飛行船「ツェッペリン」の



▲冬至に食べる豆料理「ズィルニ」。一粒一粒が涙を表しており、残さずに食べると翌年に悲しみを持ち越さないといわれている

格納庫として使用されていた建物を利用した五つのドームは乳製品、肉、魚など食材別のパビリオンになっており、さらにその倍以上の広さを誇る屋外エリアには野菜や果物、花、日用品がずらりと並んでいます。ラトビア料理のおいしさの理由を裏付けるかのように、中央市場にはその時々旬の食材が並んでいます。



ラトビア人と花

ラトビアにはいつも花があふれています。花屋は街の至る所にあり、24時間年中無休で営業している店もあります。観光地であれ一般家庭であれ、どこも常に花がいっぱいです。日本では特別な気がする花束のプレゼントもラトビアではごく普通のこと。友達を訪問する時や、出張から戻る家族を出迎える時、先生にお礼をする時など、気取ることなく花束を手をしています。慶事には奇数本を、弔事には偶数本を贈ります。特に誕生日と名前の日※2には抱えきれない程の花束が贈られます。

※2ラトビアには「名前の日を祝う」という習慣があり、カレンダーには毎日数名の名前が記載されていて、名前が載っている日とその人の「名前の日」です



▲ラトビアの神の文様が織られた民族衣装の帯



ラトビア人の宗教観

ラトビアにおける宗教の多数派はキリスト教（プロテスタント、カトリック、ロシア正教）ですが、古来より大切にされてきたのが自然崇拜。太陽や月、星といった自然を神として捉え信仰の対象とし、井戸やかまどといった身近な対象にも神の存在を見いだしてきました。13世紀初頭に北方十字軍と共にキリスト教が持ち込まれましたが、自然への信仰心は途絶えることなくキリスト教と混在し現在に至っています。

このラトビア固有の神は幾何学模様のよ

うに文様化され、民族衣装や手袋、陶器などの日用品の図柄に用いられ、お守り代わりに使用されています。



年中行事

緯度が高く、夏と冬で日照時間が大きく異なるラトビアでは太陽の動きが重要で、その節目となる立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至に祭祀が行われてきました。中でも夏至祭は別格で、昼の時間が一番長いこの特別な日を家族や親戚、友人と森や海辺で過ごします。女性は野の花で編んだ冠を、男性は樅の葉の冠をか



▼夏至祭の準備の様子

Latvia

ぶって民族衣装を着用し、ごちそうとビールをお供に、歌って、踊って焚火を囲みます。日が落ちると太陽の代わりを意味する篝火^{かがりび}を灯し、「新しい太陽」が昇るまでの時間を過ごします。夜が更けても焚火を囲んで歌と踊りは続きます。途中、次の1年の健康を祈願して焚火を飛び越え、前年の夏至祭で使った冠を焚火で燃やす一方、その年の冠は翌年の夏至祭までお守りとして家に飾ります。新しい太陽が昇るまでの時間を毎年このようにして過ごすのです。

かたや夏至祭の対極にある冬至祭、そのメインは丸太を曳きながら行う仮装行列です。悪霊に身元がばれないようにそれぞれ意味を持つ獣の仮装をし、大きな音を立てて邪気を追い払いながら丸太を曳いて家々を回ります。丸太に1年の厄が集まるので焚火で燃やして厄払いを行います。夏至祭



▲伝統的なバスケット編み

と同じように焚火を囲んでフォークダンスも。円形になることで太陽のエネルギーが得られると信じられています。

伝統的な冬至祭の一方でクリスマスも祝います。こうしたことは自然崇拝とキリスト教が混在する一例です。クリスマスマーケットが開かれ、家々にはツリーが飾られます。実はリガはクリスマスツリー発祥の地であるともいわれています。1510年、市庁舎広場に立てられたモミの木に世界で初めて装飾が施されたことが起源であるといわれています。



▲冬至祭の仮装行列



▲発祥の地に立つクリスマスツリー

質の高い伝統工芸品

近年日本でも人気を博しているのがラトビアの手工芸品。豊かな自然に恵まれたラトビアでは材料に事欠かず、穏やかで忍耐強い国民性も相まってさまざまな手仕事が生み出されてきました。麻やウールで織られた民族衣装、柳で編まれたバスケット、森の木々から作られた台所用品、細い毛糸で編む手袋など、自然を知り尽くし、美的感覚が優れたラトビア人が生み出す工芸品は美しく丈夫。また、「伝統工芸は次世代に残すべきラトビア固有の財産である」という共通認識のもとで国や自治体に保護され、その技術が継承されています。

ラトビアの神が文様化されたデザインは伝統工芸品にはもちろんのこと、最近のファッションアイテムでも多用されています。

歌う民

ラトビアのお祭りで欠かせない歌と踊り。古代よりラトビア人は日々の暮らしや自然、年中行事や冠婚葬祭を文字ではなく歌で伝えてきました。これらの全てが詰まった民謡「ダイナ」は100万編以上あるといわれ、ラトビア人の叡智の結晶です。伝統的な音楽の要が「クアクレ」という琴のような楽器。かつては人が亡くなると木から楽器を作り、奏でることで故人の魂と対話していたといわれています。



▲「歌と踊りの祭典」フィナーレのステージ

られ、国中に緊張感が走りました。

経済面ではかつてリーマンショックをV字回復させ世界の注目を集めたラトビアですが、リガ港の他、ヴェンツピルス港、リエパーヤ港という不凍港や、ロシアまで延びる鉄道によりヨーロッパとCISをつなぐ物流の要所としての地位を築いています。また、新たな鉄道を主体とした交通網の国際プロジェクトも進んでいます。これはフィンランドのヘルシンキからバルト三国を縦断してポーランドのワルシャワまでを結び、そこからさらに欧州主要国と接

続する「Rail Baltica」と呼ばれるもので、先行してバルト三国間における整備が始まっています。

最近では、新型コロナウイルスの封じ込めに成功した国として高く評価されています(2020年8月末執筆時点)。IT先進国

であるラトビアではリモートワーク化が進んでおり、世界で最初に国会をオンライン開催したことでニュースにもなりました。

日本との関係ではリガ市・神戸市の他に、ルーイエナ町・北海道東川町も姉妹都市提携を結んでおり地道な交流が続いています。また、日本からラトビアを訪れる旅行者数はうなぎ登りで、音楽や芸術分野における協力も進んでいます。2013年には日本の大手商社の海外子会社がリガの港湾運営会社を買収しており、今後も両国間の経済的な結びつきがより一層深まることが期待されています。

街歩きや芸術鑑賞、買い物、食事など、どの角度からでも楽しめるラトビアですが、その本当の魅力は日々変化する自然や激動の時代を生きてきたラトビア人そのものにあるように思います。多くの方が現地を訪れ、心に深く強く残る穏やかな時間を刻んでいただければと願っています。

関西日本ラトビア協会

〒530-8241
大阪府大阪市北区梅田3-3-5
大和ハウス大阪ビル内
TEL:06-6342-1396
FAX:06-6342-1516
E-mail: o-latvia@daiwahouse.jp
URL: <http://www.jlks-kansai.com/>



▲伝統的な民族楽器クアクレ

ユネスコ無形文化遺産でもある「歌と踊りの祭典」は100年以上の歴史を誇る壮大なお祭りです。5年に1度開催されます。期間中は全国から合唱団や舞踊団、合奏団が集まり、リガの至る所でコンサートが開催されます。特に最終夜の合唱ステージは鳥肌もので、15,000人の歌声が深夜まで響き渡ります。

自らを「歌う民」と呼ぶラトビア人。度重なる占領を受け過酷な歴史に翻弄されながらも、歌うことにより民族としての誇りを胸に連帯感を保ち続けた彼らにとって、民謡はアイデンティティーそのもののなのです。

ラトビアの現在と未来

EU加盟後は経済的にも急成長を遂げたラトビア。最大の課題はバルト三国でも突出して割合の高いロシア系住民の存在です。旧ソ連下での記憶とラトビア人がマイノリティーに陥る可能性を危惧し、ラトビア国籍取得の条件としてラトビア語の習得を義務付けていることが、時にEUで批判されています。2014年のウクライナ危機の際には、同様の事態がラトビア国内でも起こりうると考え



▲大型の外航旅客船が停泊するリガ港